

林大地さんの希望

奈良 敏行（笈の定有）

本は人を救う、しかし、人を救う本というものはない。野の読書に正解というものはないということだ。そこでは「本」は読者のためにあり、読者はいつも自分の救済求めて本を読む。

『世界への信頼と希望、そして愛』（みず書房）の著者の林大地さんが『町の本屋という物語』と『本屋のパンセ』（作品社）を読んで「作品社 note」に書評を書いて下さった。「言葉と論理が挫折するところ」というタイトルだ。

『世界への信頼と希望、そして愛』は、（「アーレント『活動的生』から考える」と副題のある本で、林さんが二十六歳で刊行された本だ。本屋の直感としても、この本はぜひ手にしてみたいし、定有堂教室「読む会」の年齢の近い人たちには特に目を通して欲しい。

知的であるという事の本質は「見当識」に似ている。知的とは言葉に住まうことだ。言葉と言葉の網の目の中に自

分の住まうところを設営することである。知性とは語る能力でもある。いまどこにいて、そしてそこにいる故に、そのように考える、ということ語りを尽くす能力でもある。

林大地さんのこのアーレント論は「希望」を語る書物だ。それも二十六歳の希望を語るものである。林さんの気づきは、「希望」を持つためには「外部」がいるという発見でもある。その発見とは何だったのだろうか。

青年期を通してのわたしの固定観念は「人はいずれ死ぬ」という一つの強迫観念の発見だった。反復する観念で、生きる根拠と未来を奪うような強度のものだった。不安があるだけで、言語化することはできなかった。林さんと同じ二十六歳の時、自主講座寺小屋教室の数人の仲間と、河口湖近くの廃屋のような農家で合宿した。夜が更けて話題が、自分の死ということに及んだ。皆、不安は共有できるのだが、言語化することはできなかった。引率の大人が一人いて、それは講師の秋山駿さんという文芸評論家だったのだが、彼はわたしたちより二十歳くらい年上だった。その時点でたどり着いた、死のイメージを語ってくれた。「それは生きながら埋められていく感覚だ」と言った。とても説得力のある共通感覚だった。

本屋になって、木下清一郎『心の起源』（中公新書）に

出合った。次のような見当識を発見した。

《必ずや滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじない心が生まれ、しかも心自身がそれを知ってしまった》

二〇〇二年の刊行だから、私が五十四歳の時点ではじめて出合った、自分の固定観念の秘密を言語化してくれる言葉だった。たしかな事実がここにあるが、しかし救いがあるわけではない。だから私はその事実に気づいた人間の運命を「オブセクション」と呼ぶしかないと思った。希望がそこにあるわけではないが、もうこれ以上「なぜ・」と問いつける必要がないと思った。答えがないのに問いが変形する、人間という謎を生き続けるだけだ。

二十六歳の林地さんは希望を語る。その見当識はアーレントの『活動的生』を読み込むところに生まれる。希望を持つためには、外部がいるという発見だ。

《私たちは自己から疎外されているのではない。むしろ自己へと疎外されているのである》

林さんがアーレントに注目するのは、世界概念を転倒するところだ。アーレントを引いて「近代を特徴づける目印は世界疎外であって、マルクスが考えたような自己疎外ではない」という。

この自己への疎外を中公新書『ハンナ・アーレント』の著者、矢野久美子さんは次のように言う。

《アーレントによれば「私」であるとは奪われていることを意味する。奪われているのは、世界の多様な見え方、すなわち世界のリアリティである。》

私的な見当識には出口がない。自分を孤立させるだけだ。人と共有できない自分のオブセクションに閉じ込められるからだ。「共有」できれば、そこに救いがあるのだろうか。河口湖廃屋農家の一夜は、いま思えば貴重な知的開眼の入口に接近していたのかもしれない。しかし「生き埋め」の言葉の強度が心に迫りすぎて沈黙するしかなかった。内向の世代だったのだ。

この「共有」に林さんは「希望」を見出す。つまり「世界」という存在だ。それは「人間と人間とのあいだの空間」だと言う。人は宿命的に「気遣い」に閉じ込められる。この気遣いには階層がある。「知性」「行為」「労働」の三つだ。労働は自分の生命の再生産へと縮こまる。労働にそなわっているのは世界形成能力ではなく世界破壊能力だという。世界とは人と人とのつながりの中に生まれる見当識だ。ここには人々が持ち寄った知性の蓄えがある。世界とはこの知性の蓄えのことだ。人が個人に追い込まれるとき、知性は消えてオブセクションが支配する。そして孤立した人々は全体主義に組み込まれていく。

林さんは「希望」を語る。世界への信頼（世界の存続・

物の持続性)、世界への希望(世界の新生・人間の出生性)、世界への愛(世界の永続性)。孤立した自己への「氣遣い」に閉じ込められることなく、「世界」への「氣遣い」へと自己を開いていくその先に「希望」があるのだ。

二十六歳の林大地さんはこの希望へと自己を投企していく。五十年長く生きてしまったわたしにとって、「世界」はそのように希望に満ちたものだったのだろうか。いま現在も「オブセクション」という欲動に導かれ続けているわたしは、林さんの言葉(福音)にまだ遅れ続けている存在なのかもしれない。

書評を書いて下さった林大地さんにとって、『本屋のパンセ』は、別の意味で遅れてやってきた言葉だった。その概念の意味世界(本屋)はもう存在しないのだ。

世界は直線的なものでなく、円環的なものかもしれないというのが、四十三年、定有堂で本を読みつづけたわたしの希望のオブセクションの姿だった。

2025.04.03.

(参考)

奈良敏行・三砂慶明編 『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』 作品社 2024

奈良敏行・三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025

林大地 『世界への信賴と希望、そして愛』 みすず書房 2023

ハンナ・アーレント 『活動的生』 みすず書房 2015

木下清一郎 『心の起源』 中公新書 2002

矢野久美子 『ハンナ・アーレント』 中公新書 2014